

読むことへの偏見をなくすために —ジェイン・オースティン『高慢と偏見』を用いた文学授業—

西垣 佐理

1. はじめに

近年、大学において文学作品が英語授業教材として用いられる事例が減少している。特に、理系学部の英語授業においては TOEIC をはじめとする英語資格試験対策の授業、外国人教員による英会話、ESP (English for Specific Purposes) 教材あるいは EGAP (English for General Academic Purposes) 教材を用いた授業がその主流を占めつつある¹。だが、訳読・精読・味読を中心としたものから速読・多読へと大学における英語リーディング授業は多様化しており、文学作品も理系学部の学習者にとって十分有効な教材となりうる。さらには、優れた文学作品を教材とすることで、速読力や英文解釈力を向上させるだけでなく、作品を自分で読み解いて語る力を養い、他の学習者たちによる解釈の発表を聞くことによって多様な読解の可能性を授業内で共有することも可能になる。文学作品を読むことは人間関係や人間の心理について理解を深めることでもあり、それが理系学生に欠けているとされがちなコミュニケーション能力の向上にもつながることが期待される。

文学作品をテキストとして用いる効果については既に数多の考察があるが、理系学生に特化して行った報告・研究例はそれほど見られない。本稿では、平成 26 年度前期に近畿大学農学部 3 年生以上対象科目「English Culture Seminar A」でジェイン・オースティンの『高慢と偏見』(Jane Austen, *Pride and Prejudice*) のリライト版をテキストとして用いた授業の実践報告をもとに、英米文学作品を英語授業のテキストとすることで、理系学生の英文読解への「苦手意識」という「偏見」がどの程度払拭されるのか、英語で「物語」を読む行為に対する意識がどのように変化するのかを検証したい。

2. 文学教材をテキストとして扱う際の利点

文学作品を言語教育の一環としてリーディング授業で扱う際、まず必要なことは、クラッシュン&テレル (1983: 162) が指摘するように「適切なテキストと目標、すなわち読む理由」である。文学作品をテキストとして扱う場合、物語内容があるため、いったんその世界に入り込めば、ストーリーに引きつけられて読み進めることが容易になるという利点がある。この場合、学習者にとって比較的馴染みやすい物語を選定する必要があるが、

うまくいけばストーリーを追うという「理由・目標」ができるため、学習者の自主的な予習を促し、自然に読解力を向上させることが容易になる。

また、英語で書かれてはいるものの、文学に描かれる人間関係などは洋の東西を問わない部分も多く、授業内でのディスカッションや批判的読み（critical reading）を進めることが比較的容易であるという点があげられる。そして、ウイドウソン（1975: 77）が指摘するように、英米文学は、英語圏文化を特徴付ける世界を見る視点を学習者に持たせるという、異文化理解のためのテキストとしても非常に有効である。特に、物語で描かれる国の歴史・社会的背景を作品から読み取り、英語圏の文化を学んでいくことで、視野の拡大や多様性の受容にもつながり、「English Culture Seminar」という科目名の主旨にも合致する。

さらに、文学作品は英語の語彙が豊富で、同じ意味を表す表現が複数出てくるため、語彙力増強や速読に向いている。本来ならば原書の方が遙かに有意な結果を生むことは自明だが、農学部では、科学論文や論説文などを読む機会はあれど、人間関係や人の心理を読み解き、「解釈する」といったコミュニケーション能力²を高めるような文章、特に文学作品に触れる機会は圧倒的に少ない。今回の授業は文学作品を教材とした初めての試みであるため、あえて原著のリライト版を使用することで英文を読むことに対する学習者の抵抗感を少しでも減らした。

リライト版の長所は、平易に書き直された語彙によって、英文の多読や速読が可能になることである。これについては高瀬（2010）が英文多読の効果として、やる気を起こす、自信をつけることができる、英語嫌い減少といった情緒的な面や、リーディング・スピードやリーディング能力向上といった技術的效果など、様々な利点を述べている。現在の農学部カリキュラム（付録1）では、英文多読授業がほとんど存在せず、多読に詳しい特定のネイティブ教員担当クラスに在籍する学習者しか受講できない状態である。また、農学部図書館には英文多読用教材の数が非常に少ないという事情もあり、今回のクラスでリライト版をテキストとして扱うことで、英文多読への導入を図る狙いもあった。

以上のように、理系学部のリーディング授業においてこれまでの訳読・精読中心ではなく内容理解と作品分析を目指した文学作品の活用によって、教材としての文学の有効性が改めて示されると思われる。さらに、授業では毎回ワークシートを活用し、引用・コメントを義務づけるなど、学習者の専門科目における発表と似た形式にしたことで、文学作品の読解と専門科目の間には研究アプローチ上の違いはそれほどないことを示すことができるという点も、通常の英語リーディング教材では得られない利点になると思われる。

3. 授業実践例

3.1. 授業対象について

今回の授業では近畿大学農学部3年生・4年生の平成26年度前期開講科目「English Culture Seminar A」の受講生を対象とした。この科目を受講するためには、1・2年次の開講科目「英語1・2・3・4」および「English Communication 1・2」の単位取得が先修条件となっている。対象科目開講時間は月曜日1限および2限の2クラスで、対象学科は月曜日1限が食品栄養学科およびバイオサイエンス学科合同のクラス、月曜日2限が環境管理学科の学習者たちのクラスである。

今回の対象科目は、たまたま空き教室の関係でPC教室の授業となったため、近大UNIPAを利用したワークシート提出が可能になり、作品の背景知識などをインターネットで情報検索させたり、社会問題にもなったコピー&ペーストについてもある程度事前に解説することができた。ICT (Information and Communication Technology) 教育の一端を取り入れられた点でも、文学講読の授業をPC教室で行うことは授業運営上極めて効果的だった。名簿上の履修登録人数は月曜1限が40名前後から25名程度、月曜2限は当初30名前後だったが、最終的には20名前後となった。これは毎回の予習・課題提出・口頭発表を負担に感じた学習者が単位取得をあきらめ、授業に来なくなったためだと考えられる。

3.2. 授業概要

「English Culture Seminar A」についての基本概要は、平成26年度『近畿大学農学部履修要項』（2014: 25）に以下のように記載されている。

ゼミ形式で、英語圏の文化に対する理解を深めながら英語を学ぶ。英語圏の国々の言語、文化、社会などの話題について読み、自分の意見をレポートにまとめ、発表したり、ディスカッションしたりすることにより、課題解決能力と高度な英語力を養成する。

そのため、授業の目標として以下の4点を設定した。第一に、英語で文学作品に親しむことで、英文読解に対する偏見をなくすこと。次に、自らの視点を構築した上で物語を読む訓練を行うことで、単なる訳読に終わらない、解釈の楽しみを身につけること。第三に、他の学習者の視点や意見を聞くことで、多様な読みの可能性および多面的な視野を身につけること。最後に、物語の社会背景などを知ることで異文化理解の一助となること、である。

3.3. 初回授業アンケート結果

初回授業時にアンケート（付録2）を実施したが、アンケート項目およびその結果は以下の表1～5の通りである。アンケート結果の総回答数は61（1限：27 + 2限：34）であるが、初回に受講した者を対象とし、2回目以降履修登録しなかった学習者も含んでいる。ただし2回目以降に受講するようになった学習者はアンケート対象外である。今回のアンケートではあえて統計学的処理を施していないが、これは今回の授業が初年度であり、回答数が少数だったため有意差が出ないからである。今後数年にわたって同様の授業を続ける予定であり、十分な回答数が集まった時点で改めて分析を試みたいと考えている。

表1：受講理由（複数回答）

	回答数		回答数
1. 単位取得のため	32	5. シラバスを見て	2
2. 授業が面白そうだった	13	6. よくわからないので試して	4
3. 英語の本が読みたいから	5	7. その他	2
4. 英語学習の必要性を感じたから	6	8. 無回答	2
		合計	66

受講理由としては「単位取得のため」という消極的なものが多数派だったが、少数ながら授業そのものに関心を持って受講してきた学習者もいた（表1）。この点について、近畿大学農学部英語カリキュラムの関係上、履修対象学年3年以上の全ての英語科目は2年次までの指定英語科目を履修済みでないと受講できない仕組みとなっており、学習者たちの先修単位数によって受講できる科目が限られているという事情によるところが大きいと思われる。

表2：物語への関心・好み

	回答数	割合
1. 好きである (Yes)	57	93%
2. 嫌いである (No)	4	7%
合計	61	100%

表3：英文による物語の読書経験の有無

	回答数	割合
1. ある (Yes)	23	38%
2. ない (No)	38	62%
合計	61	100%

表 4：英語多読授業経験の有無

	回答数	割合
1. ある (Yes)	2	3%
2. ある (No)	59	97%
合計	61	100%

物語そのものに対する拒絶反応はほとんどなく、英語で物語を読んだ経験のある学習者が複数存在したが、英文多読授業はほとんどの学習者に受講経験がなかった（表 2・3・4）。これは、農学部が多読授業がほぼなく、唯一あるのがネイティブ教員による授業（English Self-Learning A・B）のみだからである。ただし、この授業も受講対象学年が 3 年生以上のため、English Culture Seminar と同時に受講している学習者が存在する可能性は十分考えられる。

表 5：英語力（複数回答）

	回答数		回答数
1. TOEIC 350 点以下	1	6. 英検 2 級以上	2
2. TOEIC 350-500 点	13	7. 英語 3・4 クラス A-B（下位～中位）	17
3. TOEIC 500 点以上	0	8. 英語 3・4 クラス C-D（中位～上位）	31
4. 英検 3 級以下	9		
5. 英検準 2 級	14		
		合計	87

英語力に関していえば、当初この科目の設定で想定されていた TOEIC 450 点前後の学習者が比較的多く、2 年生配当の英語科目である「英語 3・4」で中位～上位クラスに所属していた学習者の方が多数派であった（表 5）。その点で、学習者の英語力はある程度一定したものであると考えられる³。

3.4. 授業内容および成績評価基準

テキスト：Jane Austen, *Pride and Prejudice* (Macmillan Readers, Level 5: Intermediate) Macmillan Languagehouse, 2005. 総ページ数：96. 総語数：23,027 語。CEFR：A2-B1、TOEIC：600-700 レベル。

作品選定理由：イギリス文学でも人気のある作品で、学習者にも受け入れやすい内容

(結婚) がテーマであること。また半期で読み終わられる分量であり、比較的読みやすい英語で書かれていること、および映像資料があることなどがあげられる。

授業の進め方：1回につき1章あるいは2章読み、14回で全文を読み終えた。一回の平均ページ数は7～10ページである。最終回の第15回目でパワーポイントのスライド付きで作品についての口頭発表を行ってもらった。具体的な授業内容は下記の成績評価基準のところでも触れるが、基本的な授業の一例を簡潔に記しておく。

<主な授業内容>

1. 小テストおよび答え合わせ 10分
2. ワークシート答え合わせおよび内容解説 30分
3. 人物・会話・社会背景等に関するコメント発表 30分
4. 映像資料 (BBC ドラマ版) による内容確認 20分

合計 90分

成績評価基準は、基本的に以下の4点から成り立っている。

1. ワークシート作成・提出：30%

1回10点満点で採点。最終授業時以外計13回分のワークシート(付録3)を作成・提出してもらった。学内システム近大UNIPAを利用し、毎回授業開始までに提出を義務づけた。提出期限に遅れると最大8点まで、コピー&ペースト発覚時は最大5点までとした。

ワークシート作成に当たって留意したことは次の通りである。当初は、人物・あらすじ・内容理解と全体的なコメント、および難しかった箇所をコメントする体裁だったが、全体的なコメントを細分化した方が回答しやすいようだったので改良した。また、自分の「読み」を、根拠を持って述べる訓練のため、必ずテキストから該当箇所の英文を引用させた。それによって各学習者の予習の有無や英語読解力を判定し、授業内発表点に換算することが容易になった。さらに、この作業は学習者たちの専門科目のレポート発表における文献引用や提示方法と基本的に同等のものだと説明することで、専門科目とのつながりを意識させた。

ただ、毎回のワークシート作業量が多かったため、学期途中で友人のワークシートをコピー&ペーストする学習者が出てきた⁴。そのため採点基準を変更し、厳正に対処するようになった結果、この問題は基本的になくなった。また、教員側の採点作業にも長時間かかり負担が大きかったため、授業内で答え合わせすることで採点時間を短縮した。

2. 小テスト：20%

1問1点×10問 = 10点満点を毎回授業開始時に3分程度で行った。内容としては語彙

の英語定義選択問題×5問と 内容理解問題 (T / F) × 5問の計 10 問である。内容理解の答え合わせを通して、前回の内容を復習する時間としても活用できた。

3. 授業内発表：20%

授業時のコメント発表や内容理解に関する発表等を総合的に判断した。特に、内容理解については必ず答えの根拠となる箇所をページ・行も含めて発言させ、TOEIC のリーディングセクションで問われるような速読力、問題把握力を高められるような工夫をした。

4. 最終授業時発表：30%

最終授業時口頭発表のために、学期途中で個々の学習者が発表したい内容についてアンケートを取り、教員がコメントをつけて返却することで発表の準備を促した。発表は専用ワークシートをあらかじめ作成し、その中に発表原稿を書かせ、発表の際にその原稿およびパワーポイントで引用を提示させるという形式で、一人あたり 3～5 分の発表をさせた。学習者たちには必ず 3 箇所以上の引用文を準備させ、引用元や出典を明記するよう指導した。

3.5. 最終授業時アンケート結果

最終授業時に行ったアンケート（付録 4）の結果は以下の表 6～15 の通りである。有効回答数は 44（1 限 25 + 2 限 19）だった。初回アンケートと同様、回答数が少なかったために統計学的処理は行っていない。

表 6：テキスト分量

	回答数	割合
1. 多すぎた	2	5%
2. 多かった	20	45%
3. 適量だった	22	50%
4. 少なかった	0	0%
5. 少なすぎた	0	0%
合計	44	100%

表 7：テキスト難易度

	回答数	割合
1. 難しすぎた	1	2%
2. 難しかった	13	30%
3. 適切だった	27	61%
4. 簡単だった	3	7%
5. 簡単すぎた	0	0%
合計	44	100%

まず、テキストの分量が多いと感じる層と適量と感じる層に二分した（表 6）。同様に、テキストの難易度は三分の一の学習者が難しかったと答える一方、適量だったと答えた学習者が大半を占めた（表 7）。これはひとえに学習者自身の英語力の差によるところが大きいと思われる。つまり、英語力の高い学習者にはさほど難しくないと感じていても、英語力の若干低い学習者にとっては語彙も難しく、分量も多いと感じたようだった。ただ、一回の授業で 7～10 ページと比較的範囲が多かったこともあり、学期前半では負担になっ

ていたようだが、後半に入って人物関係や物語の展開がある程度見えてくると、問題なく読めた学習者も多かった。

表 8：作品内容理解度

	回答数	割合
1. 全くわからなかった	0	0%
2. 少しわかりにくかった	3	7%
3. 一応理解できた	17	39%
4. 割と理解できた	22	50%
5. とてもよく理解できた	2	5%
合計	44	100%

作品内容理解の点に関して言えば、『高慢と偏見』がイギリス文学の名作ということもあって若干古い内容であり、学習者にとって時代背景や階級社会といったテーマを完全に理解するのは難しかったようだが、それでも大半の学習者が一定以上の理解ができたと答えている（表8）。

表 9：作品に関する感想およびコメント

	回答数	割合
1. 全く面白くなかった	0	0%
2. あまり面白くなかった	3	7%
3. よくわからない	17	39%
4. まあまあ面白かった	22	50%
5. とても面白かった	2	5%
合計	44	100%

コメント（抜粋）

- ・イギリスの文化を知ることができたので面白かった。
- ・人の醜い部分もしっかり描写されていて、そこがリアルで引き込まれた。
- ・昔の社会背景がわかり、面白かったです。
- ・個性的な登場人物が多く出てきて、それぞれがその時代の社会背景を表しているところが面白かった。
- ・予想通りの展開だったのでつまらなかった。
- ・結婚に至るまで、今の僕たちの恋愛と似ているので面白かった。
- ・小説自体が好きではない（面白くなかった）。

作品自体への感想としてはコメントにもあるように、物語の主要テーマ自体は「結婚」ということもあり、登場人物の性格がそれぞれはっきりしていてわかりやすく、さらに現代日本の事例で説明するなどして学習者との距離を縮めるようにした結果、ほとんどの学習者たちにとって面白く感じられたようである（表9）。

表 10：英語で物語を読むことへの意識変化およびコメント

	回答数	割合
1. 全く変化しなかった	1	2%
2. あまり変わらなかった	6	14%
3. よくわからない	10	23%
4. まあまあ面白かった	21	48%
5. とても面白かった	6	14%
合計	44	100%

コメント（抜粋）

- ・読み始めると続きが気になり、始めに感じていた取っつきにくさがなくなった。
- ・もっと辞書を片手に読む必要があると思っていたら、意外とすんなり読めた。
- ・英語で読んで内容を理解できたときの楽しさを感じられた。
- ・日本語よりもいろんな視点で読めるなと思いました。
- ・読む作業が少し楽しく感じるようになった。
- ・人物の感情を表す単語に気をつけて読む習慣ができたと思います。
- ・英語の文例を見ても、そこに物語があると思えて、読むことが怖くなくなった。
- ・英語読むのが苦手だったが、物語がわかっていくうちに楽しくなった。

今回の授業を通して英文で一つの物語を読み切るという経験をしたことで、英語で物語を読む意識は「少し変化した」あるいは「大きく変化した」と答えた層が半数以上を占めた（表10）。コメント欄にもあるように、「英語を読むのが苦手」という一種の「偏見」が、英文で物語を楽しく読み通せるようになったことで多少払拭されたのがわかる。

表 11：今後英語で物語を読みたいか

	回答数	割合
1. 二度と読みたくない	0	0%
2. あまり読みたくない	5	11%
3. よくわからない	7	16%
4. 読んでみたい	28	64%
5. 是非読みたい	4	9%
合計	44	100%

今後も英語で物語を読んでみたいと答えた学習者も半数以上いた（表 11）。偏見を払拭した後は自律的学習へとつながる結果が出たといえるが、やはり英語力の低い学習者の中には英語を読むこと自体大変苦手としており、元の動機（単位取得）以上の向上心を引き出せなかった。

表 12：今後読みたい英文ジャンル(複数回答)

	回答数
1. 小説	33
2. 詩	3
3. 戯曲	7
4. 論説文	2
5. 新聞記事	5
6. その他	2

表 13：原書で作品を読みたいか

	回答数	割合
1. はい	2	3%
2. いいえ	42	97%
合計	44	100%

表 14：映像資料は役立ったか

	回答数	割合
1. はい (Yes)	39	89%
2. どちらともいえない	5	11%
3. いいえ	0	0%
合計	44	100%

表 15：感想（自由記述）より抜粋

- ・物語を読みながら、昔の時代背景を学べて面白かったです。毎週課題をするのはとても苦労しました。
- ・文を読むだけだと、単なる文章理解になりがちですが、背景などについても一緒に学べて、とても楽しく読み切ることができて嬉しいです。
- ・恋愛ものでしかも英語だったので抵抗があったが、有名作品だけはあり面白く読めたし、読みやすい英語だった。
- ・ネットで提出するよりも紙に書きたかった。後々見直しができるので。
- ・発表は2回に分けたほうが良いと思います。
- ・発表の流れを準備していたのでそれができなくて残念でした。原稿にない部分も話したいと思っていました。

今後の希望英文ジャンルは小説が圧倒的に多く、授業テキストとして有効であることが改めて証明された（表 12）。さらに、今回はリライト版を使用したのが、原書との併用、あるいは原書を読みたいと答えた学習者が一定数いた（表 13）。映像資料に関してはほぼすべての学習者が作品理解に役立ったと答えている（表 14）。感想には、「読む」ことに対する意識変化がみられるが、毎週の課題や提出・発表方法（当初の想定人数より大幅に学習者数が多かったため、発表が1回で終わりきらなかったことによる）に関するコメントも寄せられた（表 15）。

全般的に、今回の授業を通して良かった点は、まず大半の学習者が英語で物語を読むことに対する抵抗感を減らし、肯定的になってくれたことがある。特に、農学部では実験や実習といった科目が多く、専門科目におけるレポート作成や口頭発表の機会が多いため、予習時間をとるのが大変であったことは容易に推測できる。しかも、毎回のワークシートの分量が相当なものだったため、提出期限に間に合わせるために努力して仕上げてきたこともあげられよう。さらに、こちらの想定よりも毎授業時のコメントや発表のレベルが高かったことは特筆すべきである。紙面の関係で詳細は割愛せざるを得なかったが、最終授業時の口頭発表では最長5分で良いにもかかわらず8～10分程度話す学習者が多く、当初よりも時間がかかったために学習者全員が十分に話きれない状態となる程であった。また、理系学生は物事を筋道立てて発言することやパワーポイントを用いた発表に慣れており、発表の要点を図式化して提示するなど、大変充実した授業内発表だった。そして、小説が理系学生でも十分教材として魅力的だと確認できたことは、次年度以降のテキストに文学作品を選ぶことに対して強力な後押しとなった。

4. さいごに：今後の課題と方策

今回実践した文学作品の内容理解と分析を中心とする授業は、実のところ、文学部などで伝統的に行われてきた作品研究の演習に近い形態である。そのようにきわめて「文系的」な教育手法が、理系学部である農学部においても効果的であることが分かった。文学を読むことに対する苦手意識という「偏見」さえ払拭されれば、学習者は読むこと自体を楽しみ、訳読に頼らずとも十分に内容を理解できるのである。

今回の「文系的」授業が理系学部でうまくいった要因として、PCを利用したICT教育、方法論に基づく対象＝作品の分析、分析の成果をそれぞれ発表する形式などが、理系の専門科目における学びと共通していた点が挙げられよう。事実、理系ならではの独特な発想に基づいた解釈やコメント、パワーポイントを巧みに使いこなした発表は、文系の専門課程の授業にも劣らない素晴らしい内容だった。多方面からの読みを可能にし、学習者からの自由な連想・コメントを引き出し、かつコミュニケーション能力向上にもつながるような作品をうまく選定すれば、文学は理系学部の英語リーディング授業のテキストとしても十分に有効なのである。

授業の改善点としては、ワークシートのコピー＆ペースト対策、印刷せず画面上だけでは不十分になりがちな見直しの徹底、コメント記入時の引用文を正確に理解しているか英語力を確認する作業など、さらに実用英語能力の向上を図る工夫が必要であろう。そして、授業終了後も引き続き英文による小説を読み続けてもらうという自律的学習へいかにしてつなげていくか、また、文学教材をリライト版にすべきか原書を使うべきか、といった問題については今後の課題とし、実践を積み重ねる中で考察を深めていく予定である。

*本稿はJACET 関西支部 文学教育研究会 2014年度10月例会（2014年10月25日 於：同志社大学烏丸キャンパス）で口頭発表した原稿に加筆修正を行ったものである。貴重なコメントをくださった研究会メンバーには心から御礼申し上げる。

注

- 1 文学教育においてもESPアプローチと関連づけての研究が試みられており、野口(2013)がESPアプローチ、特にコンコーダンスソフトウェアを利用した文学教育への応用例について論じている。
- 2 ウィドウソン(1991: 85)は、「言語学習の究極の目標はコミュニケーション能力の習得、つまり解釈ができるようになることだ」と述べており、その意味で解釈を最終

目標とする文学作品の読解はきわめてこの能力習得に向いていると考えられる。

- 3 近畿大学農学部では2011年度より「English Culture Seminar A・B」の先修条件を変更し、それまで記載されていた「TOEIC 450点以上取得済みであること」の文言を削除し、本文記載の通り先修科目を別途設けた。だが今回のアンケート調査により、結果として削除した条件と同レベルの学習者が集まっていることが判明した。
- 4 特に内容理解問題の回答やコメント記述を、ほとんど作品を読むことなく、間違った記述のまま友人の原稿を単純にコピー&ペーストする事例が多かった。友人同士で協力して問題に取り組む姿勢を否定するわけではないが、自律的学習につながらないという点に対して厳正に対処する必要があると判断した。

参考文献

Widdowson, H.G. (1975) *Stylistics and the Teaching of Literature*. London: Longman.

ウイドウソン H.G. 著、東後勝明・西出公之訳 (1991) 『コミュニケーションのための言語教育』 東京 大修館書店

近畿大学農学部教務委員会編 (2014) 『平成26年度 履修要項』 奈良 近畿大学農学部
スティーブン D. クラッシュェン、トレイシー D. テレル 著、藤森和子訳 (1986) 『ナチュラル・アプローチのすすめ』 東京 大修館書店

高瀬敦子 (2010) 『英語多読・多聴指導マニュアル』 東京 大修館書店

野口ジュディー (2013) 「文学テキストへの ESP アプローチの応用」 吉村俊子・安田優・石本哲子・齋藤安以子・坂本輝世・寺西雅之・幸重美津子編 『文学教材実践ハンドブック——英語教育を活性化する——』 東京 英宝社 9-19.

付録1 近畿大学農学部英語カリキュラム表

1年次	2年次	3年次以降
英語1・2	英語3・4	
English Communication 1・2	English Communication 3・4	English Special Studies A・B
	TOEIC 1・2	TOEIC 3・4
	Academic English 1・2	Academic English 3・4
		English Culture Seminar A・B
		English Self-learning A・B
		Writing A・B

上記の表を見てもわかるように、全般的に TOEIC あるいは Academic (理系英語) の路線で進めることになっている。なお、英語1-4 および English Communication1-4 はプレイメントテストによる A-D までの能力別クラス編成となっている。

付録2 初回受講アンケート

English Culture Seminar A 初回受講アンケート

1. この授業を受講する理由を書いてください。
2. 物語(小説・ライトノベル・漫画含む)を読むことは好きですか？(Yes / No)
 * 物語のどのようところが好き(あるいは苦手)ですか。具体的に記入してください。
 また、どのジャンルが好きなのか書ける人は書いてください。
3. 英語で物語を読んだ経験がありますか？(Yes / No)
 * Yes の場合、具体的な作品名を書いてください。Graded Readers でも可。
4. 多読の授業を受講したことがありますか？(Yes / No)
 * Yes の場合、具体的な作品名(もしくはレベル)、授業を受けた感想など記入してください。
5. あなたの英語力を以下に記入してください。
 TOEIC ()点 英検()級
 TOEFL()点 (IBT/PBT)
 その他の資格試験()
 * 上記のテストを受験したことがない人は、英語1・2 および英語3・4のクラスを以下に記入してください。
 英語1・2 ()クラス 英語3・4()クラス
6. 自己紹介(特に趣味・気になることなど)を記入してください。

付録3 授業ワークシート例

EC Seminar A 第13回 ワークシート(0714) [15. My Dear, Dear Lizzy!]

- この章における物語展開を簡潔に(8行以内)まとめてみましょう。
場所: (Longbourn)・時期: (→SummerとAutumnの間くらい?)

物語展開:

Mr Bennet は Elizabeth を呼び出して、Elizabeth が Mr Darcy にプロポーズされたという内容の手紙を Mr Collins が送ってきたことで、彼女をからかう。それに彼女は内心傷つく。
数日後、Mr Bingley と Mr Darcy が、Longbourn House を訪れる。Elizabeth は Mr Darcy と Kitty と共に散歩をするが、途中で Kitty は Maria Lucas に呼ばれたので、Mr Darcy と二人きりになる。そこで Elizabeth は Lydia の結婚を援助してくれたことへの感謝を伝える。彼は Elizabeth のためにただけだと言い、彼女への愛を伝え、再度プロポーズする。Elizabeth もそれに応え、二人は結ばれる。
それから Elizabeth は Jane と両親に結婚を報告してひどく驚かした後、皆から祝福を受けた。
Elizabeth と Jane の結婚式は同じ日に行われ、それは Mrs Bennet にとって大変幸せな日となった。

- 以下の質問に答えてみましょう。*(---)内に該当するページ数と行数を入れましょう。

1. → That night, Elizabeth told Jane about her walk with Mr Darcy. What do you think Elizabeth tells Jane about her conversation with Mr Darcy? (p.83-1.27-29)

Elizabeth が Mr Darcy と結婚したこと。

2. → How does Mrs Bennet feel about Elizabeth's engagement to Darcy? (p.85-1.15-20)

娘がお金持ちと結婚できると喜んでいる。

3. → "Lady Catherine helped us then," says Elizabeth to Darcy. What does Elizabeth mean by these words? (p.87-1.2-5)

Mr Darcy は、Lady Catherine が話した Lizzy の話から「もしかしら彼女は自分を愛しているかもしれない」という希望を持ち、Lizzy の気持ちを確認するために Netherfield に訪れた。
皮肉にも Lady Catherine の行動は、二人の仲を近づけさせたということ。

4. → Which people visit Darcy and Elizabeth at Pemberley? (p.87-1.12-31)

Mr Bennet, Kitty, Lydia, Miss Bingley, Mr and Mrs Gardiner

- この章内で面白い、あるいは疑問に思ったこと(人物・会話・社会背景[制度]・その他気になったこと)をそれぞれ必ず1つ以上取り上げてみましょう。
*必ず引用箇所[英文・ページ数・行数]を明示し、引用した理由や内容を必ず記載すること。

a. 人物

Mr Darcy.
"I did everything for you, not for your family," Darcy replied. (p.82-1.18).
"Miss Bennet," Darcy went on, "you told me that you disliked me last April. Please tell me if that is still true. My own feelings have not changed. But if you still dislike me, I shall not talk of love again." (p.82-1.20-23).

Lizzy 本人に、Lydia と Wickham の結婚を援助したことが Lizzy の家族のためではなく、Lizzy のためだけにしたという希望がかっこいい。言動からも本当に Lizzy を一途に思い続けていることがよくわかる。こんないい男はなかなかいないと思う。こんな人に愛される Lizzy は幸せ者だ。

b. 会話

"My behaviour at Hunsford was disgraceful," Darcy answered. "I am ashamed when I think of it." "We both behaved badly," Elizabeth said. "Since then, I hope, we have both learnt better manners." "I hope manners." (p.83-1.1-4).
"We have both changed." "Yes," Darcy replied. (p.83-1.7-9).

Mr Darcy と Lizzy は、お互いの非を認めて、共に変わっていきける関係だと思った。夫婦になってもそういう関係でいてほしい。

c. 社会背景

"My parents taught me to be proud — proud of my position in society and of my family. And pride was my strongest feeling until I met you, my dearest Elizabeth. You showed me that pride could be a fault. You rejected my proposal of marriage and you hurt my pride. I had believed you wanted me to propose." (p.83-1.9-13).

自らの社会的地位と家柄に誇りをもつよう教えられてきた Mr Darcy は、きっと Lizzy と会わなかったらここまで人間的に成長することはなかったと思う。社会的地位も家柄も違う Lizzy と接することが、自尊心の高い自分自身と向き合うことに繋がら、きっとそれはこれからの彼の人生を豊かにさせる経験となったことであろう。

d. その他

"Caroline Bingley had been angry when Darcy married Elizabeth. But Miss Bingley soon decided that she was still Jane and Elizabeth's friend. She enjoyed visiting Pemberley and spending time with Elizabeth and Georgiana Darcy." (p.87-1.20-24)

結局 Miss Bingley は、Lizzy の恋のライバルにはなりきれなかったなと思った。あれだけ Mr Darcy を振り向かせようと頑張っていたのに、彼は最初から Lizzy 一筋で、彼女の行動は全く報われなかった。Lizzy や Jane になしたことを考えれば、いい気味だとも思うが、ちょっと可哀そうだなとも思う。
正直、Lizzy と Miss Bingley が仲良くしているところが全く想像できない。まあ、一応親戚であるし、Miss Bingley 的にも Darcy 家と縁は保っておきたいから付き合いをしているのかなと思った。

- 物語全体を読み終えた感想をお聞かせください。
どの人物が一番気に入りましたか? どのエピソードが一番好きでしたか? など。

Mr Darcy.
Lizzy に1回目のプロポーズをする場面までは、なんて尊大で無礼な男なのだろうとあまり好ましく思っていなかった。しかし、Lizzy にこっぴどくプロポーズを断られたことで彼の気持ち・考え方は大きく変化し、Lizzy のためならあんなに高かったプライドをも捨てるくらいの行動をみせた。あんなに自分のプライドをすたすたにされても、彼女と再び向き合うことを選び、彼女の愛を勝ちとったことは素直にかっこいいと思った。[この小説の中で、間違いなく一番印象が変わった人物である。]

コメント [SN1] Lizzy にとって結婚の機会の増減ということになりましたね。精神上と精神的な違いを併せていないのはあまり好きではないかも思いますが。

コメント [SN2] その意味では、この466は Darcy の最終形態でもおっしゃるね。

付録4 最終授業時アンケート

English Culture Seminar A 最終授業時アンケート

*今後の授業および作品選定に役立てたいと思いますので、回答にご協力お願いいたします。

なお、このアンケートは成績評価とは一切関係ありません。

1. テキストの分量はどうでしたか。
 1. 多すぎた
 2. 多かった
 3. 適量だった
 4. 少なかった
 5. 少なすぎた
2. テキストの難易度はどうでしたか。
 1. 難しすぎた
 2. 難しかった
 3. 適切だった
 4. 簡単だった
 5. 簡単すぎた
3. 作品の内容はしっかり理解できましたか。
 1. 全くわからなかった
 2. 少しわかりにくかった
 3. 一応理解できた
 4. 割と理解できた
 5. とてもよく理解できた

*1 or 2を選んだ人:特にどの点がわかりにくかったですか。
()
4. 今回の作品についてどう思いましたか。
 1. 全く面白くなかった
 2. あまり面白くなかった
 3. よくわからない
 4. まあまあ面白かった
 5. とても面白かった

*どこが面白かった[つまらなかつた]ですか。
()
5. 今回の授業を受けて、英語で物語を読むことに対して意識の変化はありましたか。
 1. 全く変化しなかった
 2. あまり変わらなかつた
 3. よくわからない
 4. 少し変わった
 5. 大きく変化した

た
*4 or 5を選んだ人:特にどの点が変わったと思いますか。
()
6. 今後、英語で物語を読みたいですか。
 1. 二度と読みたくない
 2. あまり読みたくない
 3. よくわからない
 4. 読みたい
 5. 是非読みたい
7. 今後、英語でどんなジャンルの文章を読みたいですか。
 1. 小説
 2. 詩
 3. 戯曲
 4. 論説文
 5. 新聞記事
 6. その他(具体的に記述してください):
8. 今回の授業では作品の簡略版を使用しましたが、将来作品を原書で読みたいと思いますか。
 1. 簡略版の方が良い
 2. どちらも併用したい
 3. 原書で読みたい
9. 映像資料は作品理解に役立ちましたか。
 1. はい
 2. どちらともいえない
 3. いいえ
10. 今回の授業や作品に関する感想を自由に記述してください。作品リクエストや希望のジャンルがありましたら是非記入してください。